

フッサールによる科学の総合

(Fusserl's Integration of Sciences)

坂 恒 夫

(Tsuneo Ban)

1. はじめに

エドモンド・フッサールは現象学の創始者である。現象学は観念論的認識論に属する思想で、客観的思考を旨とする科学とは何の関係もないかのように思える。このような現象学によってフッサールは科学の総合を試みた。いかなる総合が得られたのだろうか。

筆者が現象学を知ったのは、東大を起点とする大学紛争が、全国のキャンパスを覆っていたときだった。この頃、全学ストで無聊をかこつ学生がたむろする喫茶店で、あるいはバリケード封鎖された校舎の片隅で、フッサール、メルロ＝ポンティ、ハイデガーの現象学の著作が読まれていたようである。また現象学ブームが出版界で起こり、現象学関係の著作が盛んに発行されたのも、この頃である。この時代に、なぜ現象学が求められたのだろうか。人々は現象学にいかなる問い掛けをし、いかなる解答を得たのであろうか。

大学紛争の中で綴られた文章を集める本の中に、学生が社会にあるいは自らにいかなる問い掛けをしたかを探ると、次の問い掛けが多いのに気付くであろう¹⁾；「大学とは何か」、「科学とは何か」、「社会とは何か」、「人間とは何か」、「生きるとは何か」。この「Aとは何か」の問い掛けは、いかなる性格を持った問い掛けであろうか。我々が日常生活で行なう問い掛けは、このような問い掛けではない。それは「あの学校の師弟関係はいかなる状態にあるのか」とか、「あの土地はもう安くないのだろうか」とか、「あの人は私のことをどう思っているのだろうか」といった問い掛けであろう。客観的事象を扱う科学もまた、このような問い掛けをしない。物理学の運動法則 $m \times a =$

F (質量×加速度=力) は、質量と加速度と力の間を述べているのであって、決して力とは何かを述べているのではないし、ケインズ経済学の一般理論は、所得、消費、投資の間に成り立つ関係を述べているのであって、所得とは何か、消費とは何か、投資とは何かを述べているのではないのである。このように人間の通常の間い掛けは、人間の前にある具体的なものに対して、それらに成り立つ関係を問う間い掛けなのである。これに対して「Aとは何か」の間い掛けは、無意識裏に日常扱っているものに対して、改めてそれは何かを問う間い掛けである。他のものとの関係を通してものの在り方を問う間い掛けではなくして、そのものを成り立たしめる概念枠組を問う間い掛けである。無意識裏に日常使用している概念枠組に疑念が生じて、概念枠組の成立基盤を問う間い掛けなのである。それは日常的客観思考の概念枠組を、それを超越する思考の枠組によって、根源的に捉えようとする間い掛けなのである。

それでは、この間い掛けの答は、科学の中にあるのだろうか。科学は、この間い掛けに答えることができるのだろうか。科学は、日常的客観思考の枠組を支える基盤を提供することができるのだろうか。日常的客観思考の基盤を科学の中に求めると、社会学者A. コント (A. Comte 1798~1857) は、社会学の基盤は生物学にあり、生物学の基盤は化学に、化学の基盤は物理学に、物理学の基盤は天文学に、天文学の基盤は数学にあり、数学がすべての科学の基盤であるとしたが、²⁾ このA. コントによる科学の総合のように、諸科学の中の一つを日常的客観思考の基盤とすることになろう。あるいは、心理学者ピアジェ (J. Piaget 1896~1980) は、生物学は物理学に、物理学は数学に、数学は心理学・社会学に、心理学・社会学は生物学に、それぞれ還元され、科学全体が円環構造をなすとしたが、³⁾ このピアジェによる科学の総合のように、科学全体が日常的客観思考を相互に支え合うことになろう。これらの科学的回答は「Aとは何か」の問いに答えたことになるのであろうか。科学的思考をその一部に含む日常的客観思考を根源的に捉えたことになるのであろうか。答えは否であらう。日常的客観思考を根源的・派生的に捉えるには、科学を越えた把握をせねばならない。科学以外の言葉を使わねばならないのである。

科学の中に答えがないとすれば、答えはどこにあるのか。それは日常的客観思考の形成過程に求めねばならない。日常的客観思考の萌芽が生れ、現在の形に成長する過程に、答えを求めねばならないのである。日常的客観思考は、人間を取り巻く外的環境に、人間が働き掛ける過程で生れる。人間が自らの生を見出し自らの生を投企する外的環境との交渉の過程で生れるのである。日常的客観思考は、外的環境との交渉の過程で生れる人間による形成物なのである。日常的客観思考に対する問いの答えは、日常的客観思考が生まれる外的環境との交渉過程に求めねばならないのである。人間は外的環境の中に置かれ、外的環境との交渉を宿命づけられている。外的環境の中における外的環境との不断の交渉が、人間存在の根源的在り方である。だが人間は、外的環境との交渉の自覚なしに、生を営んでいる。外的環境との交渉を意識することなしに生きている。この無意識裏に営まれる外的環境との交渉の中に、日常的客観思考の源泉を探らねばならないのである。意識を欠いた外的環境との密接な繋がりの中に、日常的客観思考への問い掛けの答えを探さねばならないのである。

現象学者メルロ＝ポンティ (M. Merleau-Ponty 1908～1961) は、著書『知覚の現象学』を書き進めるにあたって現象学を次のように定義する；「現象学は本質の研究である」、「現象学は本質を存在へと連れ戻す哲学である」、「現象学は世界を廃棄できぬ現前としていつもそこに在るとする哲学である」、「現象学は生きられた空間や時間や世界についての報告書である」、「現象学は我々の経験の直接的記述の試みである」⁴⁾。これから分かるように現象学は、「Aとは何か」の問いに答える哲学、すなわち本質の哲学なのである。「科学とは何か、人間とは何か、社会とは何か」の本質への問い掛けに積極的に答えようとする哲学なのである。さらに現象学は、その答えを、我々の経験の中に、我々によって生きられた世界の中に見出そうとする。現象学は、「すべての対象は世界の中で経験され、また世界はすべての個別的な経験において経験されている」、「世界は、個々の対象を定立する能動的な活動に先立って、我々の能動的関与なしに、前もって与えられている」、「世界とは、すべての存在者がそこから理解され、そこへ向けて理解される熟知性の基盤である」とする哲

学なのである。⁵⁾現象学は、事象を世界内での我々の経験から理解しようとする哲学なのである。我々が慣れ親しんでいる日常的客観思考から離れて、世界内存在という人間の根源的在り方から理解しようとする哲学なのである。これから大学紛争の中で現象学が何故読まれたかが理解されよう。日常的客観思考に疑問符が付されて再吟味が必要となったとき、現象学は人間存在の深奥から答えるものであったのだ。

このように現象学は日常的客観思考の成り立ちを教える哲学である。すべての科学は日常的客観思考を基盤とするから、現象学は、すべての科学の成り立ちを統一的に明らかにする。すなわち現象学はすべての科学の基礎学なのである。すべての科学の基礎を明らかにすること、それは、すべての科学を統一的に理解すること、科学を総合することであろう。現象学は科学の総合の試みの一つといえるのである。本稿はフッサールの現象学を科学の総合の試みと捉え、その内容と性格を明らかにすることを目的としている。

2. フッサールの学説の変遷

フッサールは、真摯な態度で自らの哲学を展開した人であった。思索の進展と共に言葉に新しい意味を持たせ、思索が深まると前言と矛盾する新しい主張を開陳する哲学者であった。すなわちフッサールの学説はフッサールの生の歩みと共に変化するのである。ここでフッサールの学説の変遷を概観すると共に、本稿で取り上げる学説の位置づけを行なうことにしたい。思想はそれを育む人間の生を離れて存在しない。まずフッサールの生涯から概観することにしよう。

エドムンド・フッサール (E. Husserl 1859~1938) は、1859年、現在のチェコ領、当時のオーストリア領であるプロスニッツで、ユダヤ系のドイツ人を両親として生れた。⁶⁾ギムナジウムでのフッサールは、何ごとにも興味を持たず、甚だ出来の悪い生徒であったという。だが無類の集中力を持ち、数学だけは抜群の成績であったという。ギムナジウムを卒業したフッサールは、1876年、ライプチヒ大学に入学する。専攻は天文学であった。ここでフッサールと同郷で後にチェコ大統領となったT. マサリクと親交を結び、哲学の手ほどきを受け

る。学んだ哲学は、デカルト、ライプニッツ、イギリス経験論であった。1878年、猛烈に数学に惹きつけられ、ベルリン大学哲学部に入学する。この学部は、ヴァイアシュトラス、クロネッカー、キルヒホッフを擁し、数学を学ぶものの憧れの学部であったという。殊にヴァイアシュトラスに興味を持ち、彼の講義（解析関数、楕円関数、変分法等）のすべてを聴講したという。1881年、学位論文を書くため、ウィーン大学に移る。論文「変分法論考」で、1883年、哲学の博士号を授与される。一年の兵役に服した後、当時の話題の人であった心理学者フランツ・ブレンターノの講義を、ウィーン大学で聴く。ブレンターノから職業としての哲学の崇高さを教えられ、彼の影響の下で数学の心理学的基礎づけの研究をすることになる。この研究は、ハレ大学に提出した教授資格論文「数の概念について—心理学的分析—」（1887年）となって、結実する。

ハレ大学の私講師になったフッサールは、教授資格論文の研究を継続し、『算術の哲学—心理学的・論理学的研究—』（1891年）を公刊する。だが十四年に及ぶハレ大学私講師時代に、最初の思想的転回を経験する。この転回は論理学者G. フレーゲとの交わりに起因している。フレーゲは論理主義の立場から、論理的なものと心理的なものを明確に区別し、フッサールの心理学的基礎づけを鋭く批判したのだった。この思想的葛藤の中から生れたのが、『論理学研究』（1900年）である。『論理学研究』は今までの心理学主義を清算し、論理的諸概念のイデア的性格を主張するもので、フッサール現象学の基盤を与えるものだった。この書物を出版してまもなく、1901年、ゲッチンゲン大学の員外教授に就任し、1906年、正教授に昇任する。『論理学研究』の著者を迎えて、ゲッチンゲンでは、現象学派のサークルが形成され、有能な哲学徒が数多く輩出する。だがフッサールの孤独な思索は、これらの成功を無視するかのよう、間断なく続けられる。この時期のフッサールの思想の特色は、意識・主観・自我の作用の見直しである。『論理学研究』では否定されていた認識主体の構成作用が見直されるのである。このフッサールの思索は『厳密な学としての哲学』（1911年）、『純粹現象学と現象学的哲学のためのイデー』（1913年）となって結実する。また、この時期には第一次世界大戦があって、フッサールは次男

を亡くすことになる。フッサールは、1916年、フライブルク大学正教授に就任する。この1916年から病死する1938年までの22年間のフライブルク時代は、有能なユダヤ人女流哲学者E. シュタインを助手とするなど、フッサールの最も充実した実り豊かな時代であった。この時期の研究課題は、意識の能動的な構成作用の前提をなす受動的な世界所有といえるであろう。意識は前もって与えられた世界の中で機能する、現象学は世界の中で意識がいかに機能するかを明らかにする、とフッサールは考えるのである。この時期を代表する著作には『形式論理学と超越論的論理学』（1929年）と『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936年）がある。第二次世界大戦がフッサールを苦しめたのもこの時期である。ナチス・ドイツのユダヤ人迫害によって、有能な弟子がアメリカに亡命したり、女助手E. シュタインのように、強制収容所で虐殺されたりしたのだった。

このようにフッサールの学説の変遷は、『論理学研究』に代表されるハレ大学時代、『厳密な学としての哲学』と『純粹現象学と現象学的哲学のためのイデー』に代表されるゲッチンゲン大学時代、『形式論理学と超越論的論理学』と『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』に代表されるフライブルク時代に分けることができよう。以下、この順序でフッサールの学説を概観することにしよう。

『論理学研究』においてフッサールは、数学や科学一般の基盤となる論理学が、人間の個別的体験から離れたアイデアであることを主張する。論理学的法則がいかなる性格を持つかについては様々な学説があるが、フッサールの時代においては、心理主義者はこれを心的事実の自然法則とみなし、論理主義者は規範法則とみなしていた⁷⁾という。フッサールは、これらのいずれの説にも反対する。心理主義は、論理学の理論的土台は心理学にあり心理学は論理学の基礎学であるとするが、心理学は経験的事実を下にする事実学であり、経験的事実は偶然的なものであるから、心理学から帰結する結論も、普遍性を持たず相対的なものに留まり、心理学は論理学を基礎づけ得ないとされる⁸⁾。一方論理主義は、論理学は学問の規範学であり、学問が学問であるための規範を述べるものであ

るとするが、規範学は一種の技術学に過ぎず、規範学を支える理論学を欠いており、論理学は論理的真理を持たないことになるとされる。⁹⁾このように論理学は、心理学の自然法則でも、実用的な規範法則でもないのである。それでは論理学の本質は何であろうか。フッサールは、事象の認識が可能となるには、命題を真理として、真理を他の真理の帰結として、法則を法則そのものとして、法則を説明根拠として、基本法則を究極原理として洞察する能力を、認識者は持たねばならぬとする。¹⁰⁾これらの能力は、事象の認識を支える要素、人間の思考を支える要素であり、論理学が内容とするものである。人間の認識が成り立つ以上、これらの要素を人間は持たねばならぬ、とするのである。その上でフッサールは、これらの要素がイデア的なものであることを主張する。真理・法則・根拠・原理は、人間の洞察を越えた明証的なものであり、これらが妥当するからこそ洞察が可能となるものである。これらの論理学的要素は、経験を越えたアプリアリなものであり、従ってイデア的なものだと言主張するのである。フッサールにとって論理学は、学問が成り立つイデア的諸条件についての法則なのである。このように『論理学研究』の中で、論理学が心理学の自然法則でも、実用的な規範法則でもなく、イデア的法則であることが主張されるのである。

それでは『厳密学としての哲学』と『純粹現象学と現象学的哲学のためのイデーン』の時代においては、フッサールはいかなる思想の転回を示すのか。これを『厳密学としての哲学』の中に見てみよう。この著作の中でフッサールは、自然科学・心理学・歴史学等の経験科学とは性格が異なる現象学の存在を主張する。経験科学は、経験論理を用いて経験を秩序づけ記述するに過ぎない。これに対して現象学は、経験科学が成り立つ基盤を明らかにする。現象学によって、経験科学は基礎づけられ厳密な科学となるというのである。このフッサールの主張を、少しく詳細に見てみよう。フッサールの時代の思想の潮流は自然主義である、とフッサールは考える。自然主義は、自然科学をモデルとする事象把握の手法で、自然科学が顕著な発達を遂げた結果、出現したものである。¹¹⁾自然主義は、物理的自然以外の存在者を認めない。しかも存在者すなわち自然は、確固たる法則によって一義的に規定されると考える。さらに自然主義の手

法で自らが基礎づけられ、厳密学が得られると考えるのである。だが自然主義は、アイデアの自然化と意識の自然化という二つの大罪を犯しているという。アイデアの自然化とは、アイデアたとえば形式的・論理的原理いわゆる思惟の法則を、思惟作用の自然法則とみなすことであり、これは懐疑的理論に陥るとして『論理学研究』で否定された考えである¹²⁾。一方意識の自然化とは、実験心理学で支配的な考えである。実験心理学は、意識を実験的・客観的に扱い、意識の精密科学であって厳密科学であるから、哲学の基礎を与えるという考えである。この様な考えに対して、フッサールは次の様に反論する¹³⁾。実験心理学は、自然科学を模範とする心理学である。自然科学は、出発点では素朴である。探究したいと思う自然は、既にそこに単純に存在している。自然科学は、この自明な所与物を、科学的方法をもって客観的に認識しようとするのである。同様に実験心理学でも、心理的なものは明らかに眼前の所与である。実験心理学では、心理的なものは身体という物理的事物と結合して、自明的に存在しているのである。この物理的自然として、自明的に存在する心理的なものを、客観的・妥当的に規定しようとするのが、実験心理学なのである。この事実からフッサールは、実験心理学は哲学の基礎には成り得ないという。実験心理学は、経験全体への問い掛け、たとえば、いかにして意識としての経験が対象を与えるのか、いかにして経験というものが経験を通して自らを正当化するのか、いかにして経験論理的な意識活動が客観的妥当性を意味するようになるのか、等の問い掛けに答えられないというのである。実験心理学が答えられないとすれば、問い掛けに答える学は何か。この学が現象学だとフッサールは考えるのである¹⁴⁾。現象学は、意識そのものだけから余すところなく明らかにされる意識についての学、すなわち純粹意識の学なのである。実験心理学は、意識の自然科学であって、経験的意識を扱うのに対して、現象学は純粹意識を扱うのである。この現象学に基礎づけられることによって、自然科学・実験心理学は厳密な学になるというのである。

最後にフッサールの後期思想について見てみよう。『論理学研究』に代表される前期思想では科学を支える論理法則は経験に依存せぬアイデア法則であるこ

と、『イデー』に代表される成熟期においては純粹意識を対象とする現象学によって科学は厳密な学となることが主張されたのに対して、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』で代表される後期思想においては、科学を基礎づける地盤は生活世界にあることが主張されるといえよう。生活世界は、認識あるいは実践の地平となるもので、理論的・実践的主題のすべてがその統一の内にあり、存在者のすべてが存在の前提とする存在者の普遍的領野である¹⁵⁾。生活世界は、科学的認識を内に含むあらゆる実践の地盤であり、科学的認識の明証性の基底となる先科学的な認識地盤なのである¹⁶⁾。生活世界によって、科学的認識が成立する地盤が与えられ、科学的企てが人間の様々な企ての中の一つであることが分かり、科学が厳密に基礎づけられると共に、科学の人間的意味が理解されるのである。

この様にフッサールの思想は、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』で一応の結論に達したといえるのではないか。フッサールの生を貫く問い掛け「厳密な学は、いかに得られるか」は、生活世界の発見で、一応の結論を得るのである。『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』は、フッサール思想の集大成といえるのではないか。以下、フッサールが行なった学の基礎づけによる諸学の統合すなわち総合を、この著作の中に探ろうと思う。

3. フッサールの現象学

フッサールの最晩年の著作『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下『危機』と略記）は、第一部、第二部、第三部の三つの部分から成っている。第一部では著作の動機が述べられ、第二部では、近代科学の性格、科学を厳密な学にする様々な哲学的試みの歴史が、第三部では、生活世界の意味、生活世界を主題化する判断中止、生活世界の存在論、心理学と超越論的現象学の関連が論じられている。以下、著作の順序に従って、(1)ガリレイに始まる近代科学の性格、(2)科学の基礎付けの歴史、(3)経験の地平としての生活世界、(4)生活世界の主題化のための判断中止、(5)科学の基盤としての生活世界、を考察することにしよう。

(1) ガリレイに始まる近代科学の性格

近代科学は通常ガリレイ (G. Galilei 1564~1642) に始まるとされる。この説をフッサールも支持する。だがフッサールは、近代科学の利点だけではなく、欠点もガリレイに始まるとする。ガリレイが始めた科学はいかなる性格を持っていたのか。ガリレイの科学の特色は、ガリレイの言葉「自然という書物は数学によってしか読まれ得ない」から理解されよう。通常の本物は文字で書いてあるから文字で読めるが、自然という書物は数学で書いてあるから数学でないと理解できないというのだ。すなわちガリレイは数学的自然科学という全く新しい学の領域を創設したのである。¹⁷⁾ 数学的自然科学はいかなる性格を持っているのか。数学的自然科学は測定から始まる、とフッサールは考える。自然研究者は、経験事象を測定器で測定し、諸量を数値で表わし、それらの間に成り立つ数学的関係式を求めようとする。だが測定の精度は、使用する測定器の性能、測定する技術者の技量によって変化する。従って自然研究者は、測定器の性能を向上させ、技術者の技量を高めて、より正確な数学的関係式に近づこうとする。この自然研究の研究過程は、自然研究者に次の観念をもたらすという。まず経験事象を測定し数値化する過程は、主観的・相対的な経験事象を客観的・絶対的のものとする。¹⁸⁾ 個人に生起して主観的なものに過ぎぬ経験事象が、測定によって数値と化すことによって、社会に認められる客観的のものとなるのである。すなわち主観的経験事象が客観的真理となるのである。また精度が劣る測定を改良して何度も繰り返す過程は、不断に真理に近づくという観念をもたらすという。¹⁹⁾ 正確な測定値を得ようと測定法を改良して、何度も測定を繰り返し少しずつ正確な値に近づく過程が、一步一步真理に近づくという観念を植え付けるのである。真理が無遠慮方であって、それに一步一步近づくという観念が芽生えるのである。以上のガリレイの自然研究がもたらす二つの観念を総合すると次の様になろう；自然界の真理は合理的な数式で表現され、科学はその真理に向かって無限に近付いていく。すなわち具体的事象ではなくして数学的理論が真の存在となって、人類はその真の存在に向かって無限に近づいていくのである。この科学観を持つことが、ガリレイ科学の第一の性格といえよう。

数学的理念の世界が唯一の現実世界だとするガリレイの自然科学は、自然科学の成り立ちを覆い隠してしまった、とフッサールは主張する。²⁰⁾ 数学的理念を真の存在だとするガリレイの科学は、科学が成り立つ基盤である生活世界を、数学的理念で置き換えてしまい、これを隠蔽するというのである。科学的方法・数理法則・演繹体系等の意味は、科学が成り立つ生活世界から初めて理解できるが、生活世界の隠蔽はこれを不可能にするというのである。科学が自らの成り立つ基盤を隠蔽しようとするのが、ガリレイ科学の第二の性格といえよう。ところで物質的自然を数学的に扱うガリレイ科学は、心理学等の他分野の科学にいかなる影響を与えたのか。ガリレイ科学の性格は、客観的自然の中に数学的真理を探すことにあった。物体の運動等でのガリレイ科学の成功は、ガリレイ科学の他科学への適用を誘ったが、この物質的・数学的事象把握の手法が適用されることになる。²¹⁾ たとえば心的なものを自然化し、心を法則によって規制されるとする自然主義心理学は、ガリレイ科学の物質的・数学的事象把握を心理学へ適用した結果、生れたものなのである。この物質的・数学的事象把握も、ガリレイ科学の性格といえよう。さて物質的自然を数学的に扱うガリレイ科学は、物質一元論と考えて良いのであろうか。自然の中に数学的合理性を追及するガリレイ科学は、主観における数学的理論を前提としている。²²⁾ 自然を認識する主観に数学的理論があって初めて、自然の数学的合理性を追及することが可能だというのである。数学的合理性を追及するガリレイ科学は、数学的合理性の追及を可能とする主観、すなわち心の存在を前提としているのである。ガリレイ科学は、物質と心を前提とする二元論なのである。この二元論もガリレイ科学の性格といえよう。

(2) 科学の基礎づけの歴史

フッサール現象学の見解は、科学を厳密な学とすること、すなわち科学を基礎づけて、暗黙の前提を含め普遍学とすることであった。この様な試みは、決してフッサールに始まるものではなく、徹底して厳密さを追及する様々な哲学も、この試みの一つであると考えることができる。ここでフッサールが、フッサール以前の哲学をいかに捉えていたかを考えることにしよう。世界を数学化

しようとするガリレイ科学に対する疑問、すなわち数学・物理学の根本概念が心理学的虚構に過ぎぬのではないかという疑問は、ガリレイ科学が始まった頃からあったという。この疑問は、心理学という科学の立場からの疑問であるから、客観主義的哲学からの主張といえるであろう。これに対して数学的合理性を真理だとする立場は、数学的合理性は認識主観内に形成された超越論的真理だとする立場であるから、超越論的哲学からの主張といえるであろう。近代哲学の歴史は、この客観主義的哲学と超越論的哲学の闘争の歴史であるとフッサールはいう。²³⁾

デカルト (R. Descartes, 1596~1650) は、数学的・物理学的合理主義を基礎づける哲学を、この合理主義を方法として構想したという。²⁴⁾ 数学・物理学では、明証的な公理・法則の上に、理論体系が築かれている。これと同じようにデカルトは、ガリレイ科学を基礎づける哲学を、必当的明証性の基盤の上に築こうとする。明証性は、疑いの可能性のあるものを、判断の材料から除くことによって得られる。デカルトは、この判断中止を徹底して実行する。このデカルト的判断中止から得られたものが、「われ思う」(ego cogito)の明証性である。「われ思う」が、すべての学的認識が還帰せねばならぬ根源的明証性だとデカルトは結論するのである。だがデカルトは「われ思う」の自我を捉え損なっているとフッサールは主張する。²⁵⁾ 「われ思う」の自我が、心理学的な心と同一視され、無価値にされているとする。客観科学を基礎づける「われ思う」の自我が、客観科学の心理学で展開されるという背理に陥っているとフッサールは主張するのである。

イギリス経験論についてはどうか。ロック (J. Locke, 1632~1704) の学説は、ガリレイ科学の手法を心理学に適用して、客観的・生理学的・精神物理学的科学としての心理学を築き、客観科学を基礎づけようとする試みであったといえる。²⁶⁾ この試みは、自然主義的心理学の試みであり、一種の背理に陥り、客観科学を基礎づけ得ないことは、前に述べたことである。バークリ (G. Berkeley, 1685~1753) は、自然的経験に現われる物体的事物を、事物の現われである感覚所与に還元する。一方ヒューム (D. Hume, 1711~1776) はバークリ

の感覚論を最後まで押し進める。²⁷⁾この感覚論は、ロックの自然主義的心理学を突き詰めたもので、認識の疑い得ない地盤は自己経験にあるとする経験論であり、客観科学の概念構成を感覚所与に解消しようとする認識論であることが理解できよう。この感覚論が、客観科学の概念は心理学的虚構に過ぎぬとして、客観科学を否定する独我論に行き着くことも、この学説が自然主義的心理学であることから理解できよう。

最後に、カント (I. Kant, 1724~1804) は、いかなる基礎づけを行ったのだろうか。イギリス経験論の基礎づけは、経験を基盤としたことから、背理に陥り失敗したのだった。デカルトは、客観科学を基礎づける「われ思う」の自我を発見したが、自我を心理学の心と取り違えたため、やはり失敗したのだった。カントはいかなる基礎づけを行ったのだろうか。カントは、イギリス経験論の実証主義的基礎づけに反対して、デカルトの「われ思う」の主観に戻り、超越論的主観主義という形で、基礎づけを行ったといえるだろう。²⁸⁾経験的・実証的基礎づけは明らかに背理に陥るから、デカルトの見出した最も明証的な事象である自我に戻り、主観主義・超越主義の立場で基礎づけを行うのである。単なる自我に戻る通常の主観主義では、認識主観の働きすなわち能作により、明証性・真理性は背理となってしまう。認識結果が、認識主観によって構成されたものとなって、主観的・恣意的のものになってしまうのである。それでカントは次のように考える。認識は、認識主観の超越論的形式すなわち先験的形式によって、感性的所与が取り纏められるところに成り立つ。認識は、認識対象に認識主観の先験的形式が加わって形成される、とカントは考えるのである。この先験的形式に、数学・論理学・客観科学の基盤があるとカントは考えるのである。

(3) 経験の地平としての生活世界

フッサールは、自らの学説をカント批判から展開する。カントの学説は、客観科学の前提の上に成り立つ、とフッサールは考える。²⁹⁾物理学等の客観科学は、なぜ、真理性・妥当性を持つのか。それは、主観の先験的形式によって、経験が客観化されるからではないか。客観科学の真理性によって、先験的形式の必

要性が、主張されるのである。この様に、カントの学説には客観科学が前提されている。客観科学を前提とする学説に、客観科学の基礎づけができるだろうか。フッサールは、この様に考えるのである。

フッサールは、先験的形式に代わって、生活世界（Lebenswelt）を考える。生活世界とは、存在する対象の普遍的な地平であり、対象を対象として統一する世界である。³⁰⁾たとえば人間の知覚を考えてみよう。机の上の直方体の箱を、人間はいかに知覚するのか。直方体の箱は、客体として素直に知覚されるのだろうか。机の周りを廻って直方体を眺めると、直方体は様々な形状を見せる。長方形が見え、稜線が現われ、小さな面が覗き、その面が徐々に大きくなる。だが、形状の変化にもかかわらず、直方体は一つの直方体として知覚される。これは、なぜであろうか。それは、視覚と運動感覚の時間的経過が統合されて、一つの直方体として知覚されるからである。時々刻々の形状変化を示す視覚と、知覚主体の位置を示す運動感覚が統合されて、空間的広がりを持つ一つの直方体が、主体の内部に構成されるからである。この様に、視覚と運動感覚は、共同して働くのである。物体の現われには、現われに固有な運動感覚が、対応しているのである。物体の知覚には、身体を動かすことが、本質的に属しているのである。これから、人間の行為には、主題的な対象の他に、非主題的な対象があることが理解できよう。主題的な対象に対する行為を、非主題的な対象が支えているのである。この非主題的な対象の世界が、生活世界なのである。人間に存在するものの地平として、生活世界が存在しているのである。人間は、生活世界を受動的に所有することによって、世界の中で能動的なのである。人間は、生活世界に生きるものとして、世界に属しているのである。

それでは、生活世界は客観科学といかなる関係を持つのか。諸科学は、生活世界から必要なものを取り出し利用しながら、生活世界の自明性の上に立てられている、とフッサールは主張する。³¹⁾客観科学は、生活世界の上に立てられた、論理的構築物なのである。フッサールは、客観的なものは決して経験されることがないという。客観的なものは、非直観的な論理的構築物であり、幾何学的理想形態・数系列の無限性と同じように、経験されることがないという。客観

科学は、真理自体という理念形態を目指しており、これは決して経験されることがないのである。経験しうるものは、生活世界のものだけである。生活世界は根源的明証性の世界である。生活世界は、人間によって生きられ、人間によって明証的に直観される世界である。生活世界のものは、主観的なものであり、原理的に経験し得るのである。客観科学は、生活世界の明証性の上に築かれており、これにより自らの明証性を得るのである。客観科学は、生活世界の明証性に立ち返ることにより、真理性を得るのである。客観科学は、生活世界に明証性により、検証しうるものすなわち経験しうるものとなるのである。整理すると次のようになろう。客観科学は、真理性という普遍的妥当性を求める一つの実践で、歴史的に比較的遅く現われたものだが、他の実践と同じく、生活世界を基盤として成り立っており、生活世界から真理性を得て来ている。

(4) 生活世界の主題化のための判断中止

それでは生活世界は、いかに捉えることができるのか。フッサールは、生活世界を主題化する手法として、判断中止を提示する³²⁾。人間は、自然的態度で、生を営んでいる。実践的意図をもって外部を眺め、物的対象に関心を集中している。この素朴な自然的態度を差し控え、対象と人間との関係があるがままに見詰めること。これが判断中止である。フッサールは、職業活動においても判断中止があるという。職業活動に従事する人間には、日常生活に関する関心はない。すなわち、日常生活に関する関心は、職業的事物への関心の集中により、判断中止されている。この様な判断中止を、人間の日常的な態度に対して行い、生活世界の真の姿を見出すこと。これがフッサールの目論見である。

生活世界の主題化のために、最初にせねばならぬ判断中止は、客観科学に対する判断中止である。生活世界としての世界は、客観科学が前提とする構造を、科学に先立ち既に持っている³³⁾とフッサールはいう。客観科学は、生活世界のアプリオリの構造を前提にして、成り立つのである。客観科学は、生活世界のアプリオリを前提にし、その上で行動することによって、客観科学としての役割を果たしているのである。客観科学への判断中止によって、これまで自明とされた客観科学の前提、すなわち客観科学を支えるアプリオリに、疑問符が打たれ

ることになる。たとえば、科学的批判態度および客観的世界認識という客観科学の妥当性の遂行が、差し控えられることになる。このような判断中止によって、客観科学の生活世界における成り立ちを明らかにするとともに、客観科学では捉えられぬ生活世界の真の姿を浮かび上がらせねばならぬと、フッサールは考えるのである。

だが、客観科学の判断中止という認識手段の変更では、生活世界の主題化は不完全に終る、とフッサールはいう。生活世界の真の姿は、自然的な生活態度を全面的に変更してのみ、明らかになるというのである。³⁴⁾ 自然的日常生活においては、人間の自我は外部環境の諸対象に向かい、それらと密接に絡み合っている。これらの対象は、この自我の作用の中で意識されている。この意識されるものと意識することの周りには、暗黙の妥当性の雰囲気、すなわち生きている地平が活動している。この生きている地平が、様々な対象に向かって様々な関わりを持つ流動する生を結び付け、生の分ち難い統一を形作るのである。この生きている地平を主題化するには、自然的生き方全体の遂行停止が必要である。すなわち自然的生活態度の全体と、これを支える妥当性の全体を遂行停止にする、全く新しい生き方が必要である。生活世界を主題化するには、我々自身の生き方も変えねばならぬ。このようにフッサールは主張するのである。

(5) 科学の基盤としての生活世界

判断中止によって、生活世界のいかなる性格が見出されたのか。それは、身体性、時間性、相互主観性と大別することができよう。以下、この順序で概述することにしよう。前に、物体の知覚には身体を動かすことが本質的に属していることを述べたが、身体性とは、人間は身体を通して世界に存在するということ、すなわち身体を通して知覚し、身体を通して判断し、身体を通して生きるということである。物体経験は、意識にとって単なる物体の現われの推移ではない。知覚される物体は、運動感覚として作動する身体を通して、一つの物体として知覚されるのである。知覚された物体には、知覚主体の手の動き・目の動き・身体の動きが、染み込んでいるのである。知覚された物体には、知覚主体の身体も、知覚されるのである。同様に、我々が人生の不条理に怒りを持

つとき、我々は心だけで怒るのではなく、腕でもって、足でもって、目でもって、怒るのである。我々の身体は、我々の経験全体の本拠である、とフッサールは主張するのである。³⁵⁾

それでは、時間性とはいかなる性格か。フッサールは、生活世界には本質的に時間性が帰属しているという。³⁶⁾生活世界に生起するもの、すなわち我々が合うものは、すべて時間性を帯びているという。やはり事物の知覚を通して、時間性について考えてみよう。今、私は机上の一冊の書物を眺めているとする。私は現在にのみ存在する書物を眺めているのだろうか。私は、何軒もの本屋を探して見つけたこと、意味が分からなくて何度も読み返したことを覚えている。これらの記憶を心に抱きながら私は書物を眺めている。これらの記憶は過去の出来事ではないだろうか。また私は、この書物を下に論文を書くこと、この書物を知人に紹介することを考えている。これらの願望は未来に属することではないだろうか。私は、私の過去を引き摺りながら、私の未来を予想しながら、机上の書物を眺めているのである。この様に過去と未来が現在に含まれるだけではない。現在は過去に、未来は現在にと、不断に変化している。現在は、過去と未来を内に含みながら、未来から過去へと流動しているのである。存在するものはすべて、この様な時間性を持つとフッサールはいうのである。

最後に相互主観性について考えてみよう。世界知覚において、我々は孤立しているのではなく、他の人と関係している、とフッサールはいう。³⁷⁾他人と共に生きることによって、誰でも他人の生にあずかることができる、というのである。相互主観性もやはり知覚を通して、考えることにしよう。今、数人の人が部屋の隅に置かれた花瓶を眺めているとする。このとき花瓶を眺める人は、一様に、同じ花瓶を眺めていると主張する。これはどうしてであろうか。花瓶の形は、見る場所が違うから、人によって異なるはずである。花瓶に対する記憶や期待も、人によって異なるに違いない。すなわち花瓶に対する知覚は、人によって異なるはずである。だが人は同じものを見ていると主張する。これはどうしてであろうか。これは、相互主観性によって、個々の人間が結ばれているからだ、とフッサールはいうのである。生活世界の身体性によって、様々

な場所での物体の現われが、生活世界の時間性によって、様々の時刻での物体の現われが総合されて、一つの物として知覚されたように、生活世界の相互主観性によって、個々の人間への物体の現われが総合されて、一つの物として知覚されるのである。この様に生活世界は、個々の人間に存在するのではなく、人間共同体に存在する、とフッサールは主張するのである。

4. フッサール現象学と諸科学

ここでは、フッサール現象学が行なった諸科学の現状に対する批判を通して、現象学が諸科学の本来の姿をいかに考えていたか、諸科学の間にいかなる結び付きがあると考えていたか、を考察することにする。

(1) 心理学

まず現象学に最も近い科学とされる心理学から始めることにしよう。現象学は心理学の現状をいかに批判したのか。内省的心理学は、人間の意識は主観的なもので、主観的なものは内省によってしか、近づくことができない、と主張する。だが現象学は、主観と客観は明確には区別できない、全くの主観的なものは伝達不可能である、として内省に代わって、人間の意識や体験を生起するそのままの形で捉えようとする現象学的反省が必要なことを主張する³⁸⁾。人間の知覚は知覚対象とその周りの環境とが作る全体的構造の中で形成されるとするゲシュタルト心理学に対しては、対象を環境から孤立させて扱う客観科学の世界は知覚的世界ではないことを示した、透明で実用的な自然的・自然科学的世界の手前に根源的な生の世界があることを示したとして、現象学的展開に沿うとする³⁹⁾。心理現象を生理学に基づいて説明しようとする生理学的心理学については、心理現象に解剖学を外側から張り付けるに過ぎない、一人称の科学の心理学は三人称の科学の生理学に問題の解決を任せることはできない、として生理学的心理学を斥けるとともに、因果的所与を了解的・記述的に捉え直すことにより主観と客観の二者択一を回避する現象学が必要なことを主張する⁴⁰⁾。フロイトの精神分析については、客観的・因果的手法の科学であり、無意識という理解できない概念を用いる、と批判する⁴¹⁾。精神分析は、主体の中に宿る性的エ

スが原因のごとく振る舞い、無意識裏に主体の行動を決定するとするが、意識は主体の志向過程に現前しており、無意識は存在しない、性的なものは、エスのように自体的に存在するものではなく、主体が主体の生に与える一つの意味である、と批判されるのである。これらの心理学批判から、心理学の諸科学での位置づけを探ると、次のようになろう。まず自然科学を範例とする客観科学モデルが拒否されていることから、心理学が自然科学と全く異質のものとして扱われていることが理解されよう。心理学は私の心の科学であり、私から距離を保って、孤立するものの科学ではないのである。自然科学の主観・客観の二元論を乗り越える心理学独自の方法論として主張されるのは、主観でもあり客観でもある「生きる身体」という現象学の方法論である。実存する身体という現象学の成果が、心理学の事象把握の手法となるというのである。心理学は、現象学に最も近い、現象学そのものといえる科学なのである。これは、実証科学としての心理学というものはなく、存在するのは超越論的現象学だけだ、というフッサールの言葉からも分かることである。⁴²⁾

(2) 社会学

社会学に対する批判も、客観科学との学的性格の違いの強調から開始される。⁴³⁾客観科学の目的は、説明にあるという。客観科学の目的は、どの様という問いにしか答えない法則の提示にあるのではなく、それらの法則を用いて、なぜ現象が起こるかを説明することにあるというのである。一方、社会学の目的は、了解にあるという。人間の社会的行動に向かって、客観的方法で明らかにした事実を用いて、「それは何を意味するのか」の問いを発することにあるというのである。集団的行動や文化的対象の奥には、アプリアリに措定されて、意識に上っていない意味がある。この意味を理解することが、社会学の目的だというのである。ところで上述の問いを、社会学に向かって発すれば、いかなる答えが得られるのだろうか。社会学が成り立つことには、いかなる意味が含まれるか、と問うのである。すると人間による人間の了解可能性という暗黙の前提に気付くであろう。このアプリアリな前提の上に、社会学を含む人間科学のすべてが、成り立つことに気付くであろう。人間による人間の了解可

能性とは、人間と人間の関係の特殊な場合である。人間と人間の関係は、相互主観性という根源的な生活世界の関係である。すなわち社会学は、相互主観性という根源的な関係の上に成り立つのである。社会学の学的展開に先立って、他者を相互主観性として考察し、了解の可能性を明らかにする必要があるのである。ところで生活世界の相互主観性とは、人間は他人と生きることによって他人の生を生きることができる、すべての人間は自己の内の他人とともに生きている、ということである。これから社会的なものは、思考の対象として扱うべきものではなく、体験すべきものであることが理解できよう。社会学の役割は、この体験を正確に記述し、体験の意味を理解することにあるのである。また相互主観性により、社会と個人という社会学のアポリアが解決されることにも注意しよう。個人は社会的のものであり、社会は個人の行動の中に自己を表わすのである。以上の現象学社会学批判から、次のことが理解できよう。社会学も、心理学と同じように、自然科学とは全く異質の科学とされていることである。自然科学は自然現象を説明しようとするが、社会学は社会現象を了解しようとするのである。社会学は社会現象を、生活世界の相互主観性を基盤に、了解しようとするのである。社会学は、生活世界の相互主観性の上に成り立つのである。また相互主観性は社会学の基盤を与えるだけでなく、個人と社会の問題等の社会学のアポリアを解決するのである。この様に社会学においても、心理学と同様に、現象学が大きな役割を果すのである。社会学は現象学の助けを得て初めて学として成り立つ、と現象学は考えるのである。

(3) 歴史学

歴史学は、自らの内に困難なアポリアを含む、と現象学は主張する⁴⁴⁾。歴史学が真理を持つならば、事象は歴史的にのみ存在する、という歴史学的前提に反し、逆に歴史学的前提が正しければ、自らの学説も歴史的なものとなって真理でなくなるからだ。このアポリアを現象学はいかに解決するのか。人間の歴史性は意識の時間性に起因する、と現象学は主張する⁴⁵⁾。人間が歴史的にしか存在できないのは、人間存在の根底が時間的であるからだ、と主張するのである。人間の意識は自らの中で時間を構成している。意識は、意識が意識するところ

のものを、「もはやない」という様態として、「いまだない」という様態として、あるいは現前として、今において志向するのである。すなわち過去・未来・現在が、志向的に構成されるのである。だが時間は、この様に共時的に構成されるだけではない、通時的にも統一性を持っていると現象学は主張する。現在の今は、その今が過去に追いやった「もはやない」の現前を取り戻し、その今を過去に追いやるであろう「いまだない」の現前を先取りしているのだと主張する。時間は、現在を経て過去に進む未来として時間的なものである。時間は本質的に、生成の中であって、統一性を持つものなのである。それでは、この時間性から歴史学のアポリアはいかに解決されるのか。歴史学者R. アロンの言葉を借りて「歴史学とは一つの共同体が自己自身についてもつ意識の形態である」と主張する。⁴⁶⁾ 個々の人間に自己意識があるように、人間共同体にも自己意識があり、それが歴史学だというのである。歴史学が共同体の自己意識ならば、歴史学も人間の意識と同じ時間性を持つはずである。歴史学は、共同体自身による、過去の不断の取り戻しであり、その未来へ向かっての投企である。歴史学は、時間と同じように、不断の生成の中にありながら、統一性を持つものなのである。歴史学の真理は、自然科学の真理のように非時間的なものではなく、生成の流れの中で体験されるものなのである。真理は、実現されるものであり、動いているものなのである。この真理観が、歴史学のアポリアを解決するものであることは、容易に理解されよう。最後に、歴史学と他の諸科学との関係について考えてみよう。自然科学と歴史学は異質のものとされていることは、歴史学のアポリアが自然科学的な真理観を歴史学に適用した結果だ、とされていることから理解できよう。自然科学の真理が非時間的であるのに対し、歴史学の真理は時間的・生成的であるのである。また歴史学の成立基盤・学問的意味・学問的性格が、現象学によって初めて与えられるとの主張にも注意しよう。歴史学は、人間存在の歴史性すなわち時間性を探究する学であり、生活世界の時間性を探究する現象学を礎とする学なのである。

(4) 論理学・数学

論理学・数学については、現象学はいかに考えるのか。論理学・数学に関する

る現象学の論及を列挙すると次のようになる。 「客観科学の基礎学としての論理学も、一つの素朴な考えである」、 「論理学における生活世界アプリアリは、自明性という形で前提されている」、 「徹底した根本学により、論理学は学になりうる」⁴⁷⁾。 「数学者は純粋な理論家ではなく、単に創意に富む技術者であるに過ぎない」、 「哲学的研究をまって初めて自然科学者や数学者の学問的業績が補足完成される」⁴⁸⁾。 「論理法則は理念化作用を秘めている」、 「すべての科学は沈殿した伝統の持つ可動性を持っている」、 「すべての文化的事実は人間の形成作用による形成体である」、 「幾何学は絶対的アプリアリを前提にしている」⁴⁹⁾。 「矛盾律は、絶対的法則ではなくて、経験法則である」、 「形式論理学は、超越論的論理学の上に、基礎付けられる」、 「論理学は理性の自己表明化である」、 「すべての認識は、構成する意識の作品、諸事物のただなかにおける、構成する意識の活動の産物である」⁵⁰⁾。 これらの論及から次のことが理解されよう。 まず最初は、論理学・数学も生活世界に基礎を持つということである。 論理学・数学は生活世界の上に成り立っているが、生活世界のアプリアリは自明性という形で人間に隠されている。 生活世界のアプリアリは、現象学によって初めて明らかになるというのである。 それでは、現象学が明らかにした論理学・数学の姿は、いかなるものであったのか。 まず論理学・数学は、普遍的真理なのではなく、実用的見地からの構成物であることである。 論理学・数学は、人間から遠く離れた絶対的法則を表わすのではなく、人間の実利的活動によって形成された便宜的規則を表すのである。 機械が道具として人間の行動を助けるように、論理学・数学は道具として人間の思考を助けるのである。 次に論理学・数学はいかに形成されたか、を見てみよう。 幾何学は、実用的・経験的な測定術が理念化したものである、とフッサールは主張する⁵¹⁾。 辺や角の大きさが、測定術の進歩によって、段々と正確になるという事実が、進歩の極限において成立する図形の法則、すなわち幾何学を人間の意識にもたらしたというのである。 幾何学は、人間の実践の理念化により生れた、実用的で法則的な空間形式なのである。 幾何学は、外部対象に向かう主体が形成した、客観的で合理的な科学なのである。 これから論理学・数学は、基礎づけとして現象学

の助けを借りるが、心理学・社会学・歴史学のように現象学に包摂されるものではなく、外部対象と実践的に関わりを持つ客観科学であることが理解できよう。

(5) 自然科学

最後に、自然科学に対する現象学の態度を考えよう。現象学は自然科学に対して次のように評する。「生物学的秩序や物理学的秩序は、人間的秩序の中で存続する」、「科学は、知覚される世界から出発して、この世界を説明するために構築される」、「科学の素朴性は、真理は発見されるものだとしている点、主観から独立した実在に到達しようとする点、単なる抽象を現実的と見なす点、主題化に先立つ生活世界を閑却している点にある」⁵²⁾。「生活世界において我々になじみになっている物体は、現実の物体であって、物理学のいう意味での物体ではない」、「物理学者も他の人間と同じ人間なので、生活世界、すなわち彼等の人間的関心の世界の中でおのれを意識しつつ生きながら、物理学という標題のもとに、特殊な性質の問いと実践的な企図を生活世界的事物に向けている。彼等の理論はそうした実践の結果なのである」、「解釈は様々であっても、共通の生活世界的客観、たとえば空間形態とか、運動とか、感性的性質という様なものから出発して、客観についての、すべての主観にとって無条件に妥当する真理という目標を設定するならば、我々はやはり客観科学への途に達するであろう」、「数学は、物体世界をその空間時間的な形態に関して理念化することを通じて、理念的な客観性を創造した。数学は、経験的直観的な多様な形態がその中に入っていると考えられる空間と時間という生活世界の漠然とした一般的な形式から、言葉の本来の意味での客観的な世界を初めて作り出した」⁵³⁾。これから、自然科学は、自然についての普遍的知識であるのではなく、ある意図の下での人間の構成物である、との主張が理解できよう。自然科学は、生活世界的事物に向けられた実践的意図から、その意図の実現にふさわしい形態に仕上げられた、知識体系なのである。それは、自然的事物のありのままの記述なのでなく、自然科学の観点から見た事物の特殊な記述なのである。自然科学は、生活世界的事物に対する人間の態度の一つの表現なのである。それ

では、密接な関係が推測される論理学・数学とは、いかなる関係にあるのか。ガリレイに始まる近代科学の特色は数学化にある、とのフッサールの主張は前に述べたことである。数学が加わって自然科学は初めて自然科学となる、と現象学は考えるのである。自然科学の特色である客観性・因果性・合理性・法則性は、数学によって初めて明確な形を持つとされるのである。この様に、自然科学は数学の上に成り立つ、と現象学は主張するのである。また自然科学が、現象学の対象である生活世界の上に成り立つとされることも、自然科学の手法が素朴であるとされることから、理解できよう。自然科学も他の諸科学と同じように、現象学の助けを借りて厳密な学となる、とされるのである。

5. フッサール現象学による科学の統合

ここで上述の諸科学の相互の関連について考えてみる。現象学は、諸科学を無前提な基礎の上に確立しようとする、すなわち基礎づけを通して諸科学を結び付けようとする学である。現象学は、諸科学がいかなる繋がりを持つというのか。

前節の現象学の科学観を整理すると次のようになろう。心理学は、客観科学である自然科学をモデルに自らの学を築こうとする。だが人間の行動を対象とする心理学は、主観から離れた事象を扱う自然科学をモデルとすることはできない。人間は、現在および過去の身体を介して、行動する。この行動の身体性は、現象学が明らかにしたことである。すなわち心理学は現象学の基礎の上に築かねばならない。社会学は、自然科学が自然現象を説明するのに対して、社会現象を了解しようとする。社会現象を流れる意味を了解しようとするのである。この了解は相互主観性に基づいている。相互主観性は生活世界の一特性である。すなわち社会学は現象学の上に成り立つのであり、逆に現象学は社会学によって内容を豊かにするのである。歴史学は、自らの内にアポリアを含むという。歴史学の歴史性は、歴史学の真理性を破壊し、歴史学の真理性は、歴史学の歴史性を破壊するのである。このアポリアは、歴史が共同体の自己意識であることから解消される。個人の自己意識が時間性を持つ様に、共同体の自己

意識も時間性を持つのである。時間とは不断の生成の中にあるものであり、時間における真理とは生成の中で体験されるものである。従って歴史学も現象学の上に成り立つことになる。論理学・数学は、絶対的真理なのではなく、実践的意図から構築されたものである。不断に正確に測定する行為が、理念化・客観化したものである。論理学・数学は、自然科学と同じ様な、経験則なのである。だが論理学・数学は、自らの成り立ちを知らない。成り立ちは自明性の中に隠されている。成り立ちは現象学によって明らかにされるのである。最後に自然科学について見てみよう。自然科学も、普遍的真理ではなく、実用的な合理的法則を、内容とするのである。自然科学は、生活世界内の事物への働き掛けを目的とする、人間による構築物なのである。また自然科学の成立には、数学の助けが必要である。自然科学は、数学によって、合理性・法則性・客観性を得るのである。だが自然科学の意味や成り立ちは人間に隠されている。これは現象学によって明らかになるのである。

上述の整理から、心理学・社会学・歴史学が、類似の科学的位置を占めることに気付かれよう。これらの科学は、人間に関する事象を扱う科学であり、人間から隔絶した事象を扱う自然科学とは、性格が異なるのである。これらの科学は、人間の振舞についての科学であり、生活世界における人間の生についての科学なのである。すなわち、これらの科学は、現象学と重なる領域を持つのである。現象学が生活世界を原理的に明らかにするのに対し、これらの科学は生活世界を具体的に明らかにするのである。これらの科学は現象学と密接な関係を持つ科学なのである。だが、これらの科学は、現象学に対して、それぞれ固有の役割を持っている。現象学は、身体性・相互主観性・時間性という生活世界の三つの性格を明らかにしたが、心理学・社会学・歴史学はこれらの性格の一つを探究する科学なのである。心理学は身体性を、社会学は相互主観性を、歴史学は時間性をそれぞれ探究するのである。もちろん、生活世界の事象はすべて三つの性格を帯びている。いずれか一つの性格を欠いた事象など、生活世界では存在し得ないのである。だが、これらの性格の一つが強く現れる領野がある。それが、心理・社会・歴史の領野であり、その領野を心理学・社会学・

歴史学が探究するのである。以上の考察から、心理学・社会学・歴史学の、諸科学における位置づけは、次の様になるろう；心理学・社会学・歴史学は、現象学に対して類似の位置にあり、現象学が明らかにした生活世界の三つの性格、身体性・相互主観性・時間性が強く現れる領野、すなわち心理・社会・歴史の領野を、現象学の原理的探究とは異なって、具体的に探究するのである。

論理学・数学は、人間の実践的行動が、理念化したものである。論理学・数学は、人間の実践的・実利的行動に、関連を持つのである。心理学・社会学・歴史学が、生活世界における人間の生の意味を探究する科学で、人間の生すなわち純粋な行動に関連するのに対し、論理学・数学は実践的行動に関連するのである。論理学・数学は、実践的意図からの、人間による構成物なのである。だが、論理学・数学の成り立ちは、人間に隠されている。成り立ちを明らかにする学は、生活世界を探究する学、すなわち現象学・心理学・社会学・歴史学である。すなわち論理学・数学は、現象学・心理学・社会学・歴史学の上に成り立つことになる。次に自然科学について見てみよう。自然科学も、論理学・数学と同じく、実践的目的から人間が構築したものである。論理学・数学と同じく、人間の実践的行動が理念化したものである。だが自然科学の理念化は、論理学・数学の理念化と性格が異なっている。論理学・数学の理念化が測定等の実際の行動から生じたのに対して、自然科学の理念化は自然の数学化から派生するのである。自然科学は、自然を数学的に捉えることにより、理念化するのである。自然科学は、数学によって理念化され、客観性・法則性・合理性を得るのである。だが、自然科学の成り立ち・人間的意味は、やはり人間に隠されている。自然科学の基礎づけに、現象学・心理学・社会学・歴史学が必要なのである。すなわち自然科学は、これらの学の上に成り立っているのである。以上の考察から次のことが理解できよう；論理学・数学および自然科学は、人間の実践的行動の理念化によって生じたもので、純粋行動を対象とする現象学・心理学・社会学・歴史学と性格を異にするが、自然科学は、理念化を数学によって行い、数学の上に成り立つ一方、論理学・数学および自然科学は、基礎づけの点で、現象学・心理学・社会学・歴史学の上に成り立っている。

以上の考察から、科学間の次の繋がりが推察されよう。現象学は、人間の生の場である生活世界を究める、最も根源的な学である。心理学・社会学・歴史学・論理学・数学・自然科学はすべて、生活世界での人間の営みの結果、生れたものである。すなわち、これらの科学は、自らの全体像の把握を、現象学に負っているのである。これらの科学は、現象学によって、自らの姿を知ることができるのである。心理学・社会学・歴史学は、人間の営みに関する科学であり、生活世界での人間の振舞に関する科学である。これらの科学は、生活世界の三つの性格、身体性・相互主観性・時間性が強く現れる領域を、分担して探究している。心理学が身体性を、社会学が相互主観性を、歴史学が時間性を、専らとして研究するのである。この様に、心理学・社会学・歴史学と現象学は、生活世界という共通の探究領域を持つが、現象学が生活世界の根源的原理を探究するのに対して、心理学・社会学・歴史学は生活世界の具体的在り方を探究するという形で住み分けをしている。論理学・数学は、人間の実践的活動が理念化したものであり、人間が構築したものである。だが理念化の過程は人間に隠されており、この過程は現象学・心理学・社会学・歴史学によって明らかにされることから、論理学・数学はこれらの学の上に成り立つことになる。自然科学は、論理学・数学と同じく、人間の実践的活動が理念化したものである。自然科学の理念化は、測定等の人間活動が直接理念化した論理学・数学とは違って、自然現象を数学化することによって理念化が行われる。すなわち自然科学は、論理学・数学の上に成り立つのである。また自然科学の理念化は、生活世界の内で行われ、やはり人間に隠されている。自然科学は、基礎づけに現象学・心理学・社会学・歴史学に依存することになる。

以上の考察を再考すると、心理学・社会学・歴史学と、論理学・数学・自然科学とは、性格が異なる学として把握されている様に思える。心理学・社会学・歴史学は人間の振舞に関する学であり、論理学・数学・自然科学は、実践的活動が理念化したもの、すなわち外部対象に関する学であるかの様に思える。この様な性格の違いが本当にあるのだろうか。現象学から見れば、外部対象も、生活世界における事物である。生活世界における事物の特殊な現れである。す

なわち論理学・数学・自然科学も、生活世界の事物に対する人間の働き掛けから、成立したものである。論理学・数学・自然科学も、心理学・社会学・歴史学と同じく、人間の振舞についての学なのである。それでは、上述の科学間の階層的な繋がり、なぜ生じるのであろうか。科学は、何らかのアプリオリを前提として、構築される。前提となるアプリオリは、他の科学の科学的成果であったり、無意識裏に使われる生活世界のアプリオリであったりする。これらのアプリオリの上に、科学は構築されるのである。自然科学は、論理学・数学のアプリオリと、生活世界のアプリオリの上に、構築されている。論理学・数学は、生活世界のアプリオリの上に、構築されている。これが、自然科学、論理学・数学および現象学・心理学・社会学・歴史学の間を繋ぎを形作るのである。この様に科学は、必ず何らかのアプリオリの上に、築かれている。このアプリオリが、科学間の繋がりを作るのである。だが、このアプリオリは人間に隠されている。この隠された科学のアプリオリを明示し、科学の成立基盤を明確にして、科学を原理的に統合すること、これが厳密な学をめざす現象学の役割だ、とフッサールは考えるのである。

参考文献

- 1) 次の文献を参考にした。
東大新聞研究所、東大紛争文書研究会『東大紛争の記録』日本評論社（1969年）。
東大全学共闘会議『砦の上にながれらの世界を』亜紀書房（1969年）。
東大闘争討論資料刊行会『日本の大学革命4 東大解体の論理』日本評論社（1969年）。
- 2) 坂恒夫「コントにおける科学の総合」岐阜薬科大学教養科紀要（創刊号，1989年）。
- 3) 坂恒夫「ピアジェによる科学の総合」岐阜薬科大学教養科紀要（第2号，1990年）。
- 4) M.メルロー＝ポンティ『知覚の現象学1』（竹内、小木訳）みすず書房（1967年），1頁。
- 5) 木田元『現象学』岩波書店（1970年），64～65頁。
- 6) フッサールの生涯については次の文献を参考にした。
田島節夫『フッサール』講談社（1981年）。
立松弘孝「フッサール その生涯と思想」現代思想（十月臨時増刊号，1978年）。
- 7) 田島節夫『フッサール』講談社（1981年），90頁。

- 8) E. フッサール『論理学研究 I』(立松弘孝訳) みすず書房(1968年), 第7章.
- 9) 文献8), 第1章と第2章.
- 10) 文献8), 第11章.
- 11) E. フッサール『厳密な学としての哲学』(佐竹哲雄訳) 岩波書店(1969年), 12~13頁.
- 12) 文献11), 14頁.
- 13) 文献11), 22~25頁.
- 14) 文献11), 25~31頁.
- 15) 新田義弘『現象学』岩波書店(1978年), 134頁.
- 16) 文献15), 132~133頁.
- 17) E. フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(細谷、木田訳) 中央公論社(1974年), 第8節.
- 18) 文献17), 第9節.
- 19) 文献17), 第9節.
- 20) 文献17), 第9節.
- 21) 文献17), 第10節.
- 22) 文献17), 第11節.
- 23) 文献17), 第14節.
- 24) 文献17), 第16節~第17節.
- 25) 文献17), 第18節.
- 26) 文献17), 第22節.
- 27) 文献17), 第23節.
- 28) 文献17), 第25節.
- 29) 文献17), 第28節.
- 30) 文献17), 第28節.
- 31) 文献17), 第34節.
- 32) 文献17), 第35節.
- 33) 文献17), 第36節.
- 34) 文献17), 第39節~第40節.
- 35) ロブレクツ, ヘルト『フッサールの現象学』(粉川哲夫訳) せりか書房(1971年), 31頁.
- 36) 文献17), 第49節.
- 37) 文献17), 第47節.
- 38) J-F. リオタール『現象学』(高橋允昭訳) 白水社(1965年), 67頁~70頁.
- 39) 文献38), 73頁~79頁.
- 40) 文献38), 79頁~87頁.
- 41) 文献38), 87頁~90頁.
- 42) 文献17), 第72節.

- 43) 文献38) , 91頁～111頁.
- 44) 文献11) , 79頁～90頁.
- 45) 文献38) , 112頁～142頁.
- 46) 文献38) , 124頁.
- 47) 文献17) , 第36節.
- 48) 文献8) , 第11章.
- 49) E. フッサール「幾何学の起源について」(細谷、木田訳) (E. フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社(1974年)に収録) .
- 50) 文献35) .
- 51) 文献17) , 第9節.
- 52) 文献35) .
- 53) 文献17) , 第9節, 第36節.